

4ヶ月健診



7ヶ月健診



1歳児健診



すくすく育て

乳幼児健診

平成26年7月18日(千寿苑)



日本国大使公邸にて



出演者・人形紹介



リハーサル



ふれあいタイム

「ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)没後110年記念」
清和文楽人形芝居「雪おんな」ギリシヤ公演

清和文楽人形芝居保存会(倉岡輝司会長、14名)が、7月1日から9日までの日程で、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の生誕の地、ギリシヤ・レフカダ島を訪問し、「雪おんな」の公演や交流を行いました。

ギリシヤ・レフカダ市で、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)1850(1904)没後110年記念事業がおこなわれ、この年にレフカダ市からハーンの本孫、小泉凡氏を通じて、日本の伝統芸能「文楽」にハーンを公演演目として披露願った。清和文楽人形芝居をぜひ披露願ったとの依頼がありました。

ハーンは、熊本にゆかりが深く、明治24年熊本に五高の英語教師として着任し3年間を過ごしました。その間に長男が誕生、ハーンは熊本で精力的に文筆活動を行って来ます。熊本を舞台とした作品では、「石仏」や「夏の日の夢」、「願望成就」、「九州の学生とともに」、「停車場」などがあげられます。ハーンは、熊本を離れた翌年の明治28年(1895)に帰化し「小泉八雲」に改名。「熊本」の3年間は、私の文学修行の中で最も意義ある3年間であった」と後に振り返っています。

作品怪談の中の「雪おんな」は、脚本を半藤一利が担当し作成された。清和文楽人形芝居保存会が公演しています。

清和文楽は、160年間、農家の人々たちによって大切に伝承されてきた素朴な農村文化芸能であり、昭和54年に熊本県平成4年に開館した九州で唯一の人形芝居専用劇場「清和文楽館」で、年間150回前後の公演を行っています。

ギリシヤ公演にあたっては、「清和文楽ギリシヤ公演実行委員会」(副島隆実行委員長他9名)が組織され、海外公演にあたっての窓口を引き受け今回の事業が行われました。

会長である副島氏は、(株)お菓子の香梅の代表取締役会長で、熊本アイルランド協会会長でもあります。また、旧清和村時代から今日まで、栗を使った特産品の開発や清和文楽人形芝居の支援などにも尽力戴いて

います。

小泉八雲資料館の記念式典
レフカダ市長・駐ギリシヤ大使も出席

レフカダ市文化センターに、八雲の作品や写真を展示した資料館もオープンし、その式典に人形と共に参加しました。式典には、西村万寿夫駐ギリシヤ大使やレフカダ市長も出席され、小泉凡氏が資料館の展示品を通じて世界の人々に八雲のことを知ってほしいと挨拶。

夕闇に清和文楽人形が映え、幻想的な人形芝居に喝采!!!

7月6日の公演には、5000人を越える来場者があり、45分間の公演時間中も席を立つ人はなく、公演終了後には盛んな拍手と歓声が約1分間鳴り止みませんでした。

公演後、倉岡清和文楽人形芝居保存会会長がぜひ日本に、そして山都町にこれらすることを願っており、御礼の挨拶をされる。後、記念写真のふれあいタイムでは、記念写真を撮る人、質問する人、握手を求め人など、質素な思いの交流が続けられました。

海外公演を執行するにあたっては、土地柄や文化、考え方の違いなどがよくありますが、実際に現地に行くと、受け入れ態勢や公演会場の舞台設定や通訳など、事前の打合せとは異なることが多く、特に舞台設定がされておらず、スタッフ総動員で運営に取り組み、現地添乗員や通訳も手伝わらなくては準備が行われませんでした。

製作は深夜に及びまる2日間を要しましたが立派な舞台設定ができました。現地からは、ギリシヤ語の字幕が必要との要望もありましたが、上演前に出演人形の紹介とあらすじをギリシヤ語で朗読することにより、少いながらも現地の方々に理解できるような工夫がされました。

公演の成功に手応え、清和文楽人形芝居を世界に発信

深夜の反省会では、参加者全員が感想を述べられ、皆さん一応に感激と感動の様子で、上演の中で、今回の公演の実行委員である副島隆会長は、「私は、清和村時代から清和文楽館にいたが、改めて清和文楽人形

芝居の素晴らしさを実感させていた。そして、今日の感動は清和文楽と山都町の素晴らしい再認識の大変貴重な経験でした。また、アイルランドやイタリアの公演でも実文化の言葉は要らない、清和文楽人形芝居に通訳はなくても、言葉は通じなくても心と体で理解して人形芝居は国境や言語を越えた一流の文化であると思えます。」と締めくくられました。

今回の公演は、国際交流という点でも大きな成果を収めることができました。今後は、凱旋公演や写真展等が清和文楽館や鶴屋ホール、お菓子の香梅などで山都町物産展と併せて開催されます。

ギリシヤ公演を契機として、清和文楽人形芝居の農村文化と山都町の歴史や文化の素晴らしさと、美しい自然や優れた農産物を情報発信し地域振興に繋げられることに大きな期待が高まっています。